

現代における定時制高校の役割

柿内 真紀*, 大谷 直史*, 太田 美幸*

The Current Role of Part-time High Schools

KAKIUCHI Maki, OOTANI Tadaki, OHTA Miyuki

(*鳥取大学生涯教育総合センター)

キーワード：定時制高校，通信制高校，周辺化

Key words: Part-time High School, Correspondence High School, Marginalization

はじめに

本共同研究の基本的課題は、現代の定時制高校が置かれている状況、抱えている問題群、そこからの転換の可能性を明らかにすることにある。そして、そこで常に問われるのは、定時制高校の役割である。主として勤労青年の学びを支えてきた定時制高校の役割が変化するなかで、1990年代以降特に顕著となった高校改革下での定時制高校についてはすでに別稿¹で考察したが、そこで明らかになったのは次のような状況であった。以下、再掲する。

- (1) 1990年代半ば以降、新たなタイプの定時制高校が生まれている。特に大都市部を中心に昼夜間多部制、単位制、3修制(3年間で卒業)を軸に形成される定時制高校が出現してきている。こうした定時制高校の中には入学時の生徒数充足率、卒業達成率共に高く、また卒業後の進路で大学・短大、専門・各種学校等への進学者も相対的に高くなっている例もみられる。こうした学校の中には、従来考えられてきた定時制高校の範疇を離れた新たな高校として出現した学校も存在している。
- (2) 地方都市部の定時制高校の場合、新たなタイプの定時制高校に入学志願者を集めようとしても、入学志願者の数は限定され、必ずしも定時制高校の意図通りには進まないという事情が大きいと考えられる。従ってそうした定時制高校が抱えている構想は都市部の学校と同様であっても実際には実現し得ないことになる。結果としてこうした高校では新たな構想を多様に取り込むことが学校・教員にとっては大きな負担となっている場合がある。
- (3) 上記のような改革には手を打てないでいる学校では基本的には従来の姿勢で生徒の指導に取り組んでいる。そのことは指導の持続性と安定性という意味では評価し得る側面を持っている。農村部・漁村部・離島では特にこうした特徴を示す定時制高校が多い。しかしその場合、入学志願者数の減少という事実が、こうした定時制高校の整理、縮小、統廃合という圧力として強くのしかかっている。

戦後の高校制度が発足する1948年に新たに創設された定時制高校は、1953年まで入学者数は拡大するが、1965年までその水準を維持した後は、長期間にわたって減少傾向を示してきた。

それと同時に、定時制高校に入学する生徒層の多様化が進んでいる。多様化が進んだ時期、つまり定時制高校にとっての転換期はおそらく二度あるのではないかと考えられる。一つは、前田による地方都市型定時制高校の研究²において、定時制が全日制の受け皿となったという意味で転換期として示されている1970年代である。同時にこの時期は1950年代から一貫して伸び続けた高校等への進学率が1974年度について90%に達する時期でもある。オイル・ショックから不況に見舞われ、より狭くなった就職先を獲得するためにはより高い学歴をと、受験競争に拍車がかかったとされ、さらに1968年から69年にかけて改訂された、学習水準を一層高めた学習指導要領によって、落ちこぼれが増加し始めた時期とも重なっている。この時期に前田が指摘するように、定時制高校の転換期があったのではないだろうか。そして、二つめの転換期が上述(1)のように1990年代である。後者の転換期は制度的な転換期とも言えよう。

そうした多様化した生徒層とは、家計状況に規定された就労の必要性を抱える生徒だけではなく、低学力のために全日制課程へ進学できない、中学校での不登校経験がある、高校中退経験がある、非行等で逸脱者と見なされている、心身の障害など、これまでの高校教育の限界領域にいるといった生徒たちである。こうした定時制高校の状況を、かつて片岡栄美はスティグマと呼び³、定時制高校への入学がスティグマとしての意味を持ち、彼ら自身がスティグマとしての自己の位置を捉えていくという意味で、定時制高校の位置の根本にせまる問題であると指摘している。

では、現在の定時制高校の果たしている役割とはいったい何なのか、それをあらためて問う必要がある。そこで、本稿では、先の別稿で明らかにしたように、多様化する定時制高校の影響がより浮き彫りにされる地方都市に焦点をあて、教員および生徒への質問紙調査結果を中心にその役割を考察する。考察にあたっては、まずはこれまでの定時制高校に関する先行研究を再度捉え直し、再浮上する定時制高校のありようを描き出すこととする。次に、地方に所在する定時制高校の聞き取り調査結果から、語られた現在の定時制高校像を導き出し、最後に3地方都市に所在する高校を対象とした質問紙調査結果を分析・考察することにより、現代の定時制高校の役割について論じることとする。なお、質問紙調査は、定時制高校と接面をもつ通信制高校、また比較対象として全日制高校を対象に含めて実施している。

1. 定時制高校研究の課題

教育の機会均等の理念のもと、勤労青少年に後期中等教育を受ける機会を保障すべく発足した定時制高校は、1960年代以降その変質について多く語られるようになった。それはまず普通教育偏重批判とともに語られ、60年代には全日制の「亜流」という位置づけがなされるようになった。片岡栄美は、1965年以降定時制高校生徒が「学力は高いが経済的余裕の少ない家庭出身者」から、「経済的に余裕はあるが学力が低い者」あるいは「経済的余裕もあまりなく、学力も低い者」が多数を占めるようになってきたと分析し、その過程で全日制高校の「亜流」となり、社会的上昇の可能性を断たれた者のための場に固定されたことを指摘した⁴。これはまた定時制高校の「終焉」として語られてもいる⁵。

現在、定時制高校への進学は必ずしも経済的な余裕のなさや低学力によるものだけではない。不登校経験者、全日制高校中退者、外国人生徒、非行経験者、発達障害など「多様なバックグラウンド」を持つ生徒が定時制高校に集まっていることは、とりわけ1990年代以降、周知のこととなっている。都市部では「チャレンジスクール」「エンカレッジスクール」(東京都)、「ク

リエイティブスクール」(大阪府)など新しい名称をもつ学校が創設され、定時制課程の枠組みの中で「これまでの教育の中では自己の能力や適性を十分に活かしきれなかった生徒」(東京都)等を対象とした学校づくりが進行しているし、地方においても、「より個性を尊重する」「多様なニーズに対応する」「再チャレンジを可能にする」ことを目指した定時制高校の統廃合や学科再編が目立っており、制度の上でも生徒の質的多様性への対応が進められている。かつて定時制高校に付与された「勤労青少年に教育機会を提供する」「低所得者層に教育機会を提供する」「成人にリカレント教育の機会を提供する」という役割は、すっかり後景に退いているのが現状である。

だが、こうした現代定時制高校のありようを詳細に調査し、その全体像を描き出す研究はほとんど行われていない。若者たちの自立を支援しながら選抜・配分装置としても機能する教育制度のなかで、定時制高校は独特の教育空間を形成し、ある層の若者たちの自立と移行を支えてきた。そこで、本章では、定時制高校に関する先行研究を再度捉え直し、そこから再浮上する定時制高校のありようをまずは描き出すこととする。

1-1 先行研究の展開

(1) 戦後定時制高校の社会的機能に関する研究

戦後から1970年代頃までを対象として定時制高校の社会的機能を検討した片岡栄美の研究によれば、農村地域の定時制高校の多くは「平等主義的教育要求を吸い上げる装置⁸」として発足した。また、発足当初(1940年代末～1950年代初頭)には、「地域の勤労青少年を收容することによる秩序維持機能」⁷も期待されており、地域の青年層を教育的な組織に所属させることによって社会に定着させる機関として利用しようとする教育関係者や地域指導者の意図があったと考えられる。もともと、定時制高校に対する農村社会の期待は農村に住む青少年が教育機会を得ることそのものにあり、1950年代半ばまでは全日制の代替的役割を果たしていた。したがって、1950年代後半頃から農村地域の昼間定時制は全日制へと転換されたり、統廃合されてその数を減少させたりしていった⁸。この頃には、地方の中卒者の都市部への就職も一般化していた。

一方、1950年代前半までの都市部定時制は、都市の貧困層出身で上昇移動欲求が強く、かつ成績のよい生徒を多数吸収していた。定時制を経て職業的成功を収めた者も多数存在した。都市部においては、定時制高校は「働きながら学んだとしても、大学へ入学でき、地位の上昇が可能であるという成功への希望と期待を抱かせる装置」⁹だったのである。しかし、高校進学率が80%を超えた1970年頃から貧困層の勤労青少年は減少し、定時制高校生徒数も60年代半ばから減少しはじめ、定時制に通う生徒層の変化も顕在化していった。この時期以降、定時制を経た上昇移動の成功例はほとんど語られなくなる。

そして、今井によれば、70年代後半以降の定時制高校は「全日制失敗組の受け皿」¹⁰となった。今井は、1970年代後半から80年代半ばにかけての定時制高校は「スラム化」していたと表現している。無職生徒も増え、「本来の勤労青年」が期待が外れて退学するという現象もみられるようになっていた。その後、全日制高校の定員拡大がすすみ、中学時代の問題行動のために定時制高校に進学せざるを得なかった生徒が、希望通り全日制高校に進学するケースが増えていく。一方で、中学時代に不登校であったり、いじめられた経験をもつ子どもが定時制高校に入学するようになっていったのである。

この状態は以後も継続していると思われるが、実際のところ、90年代以降の定時制高校の状況を調査し、その全体像を明らかにする研究はほとんど行われてこなかった。現代の定時制高校は、後期中等教育全体においてどのように位置づけることができるのか。どのような生徒が入学し、どのような学校生活を送り、どのような成長を果たして卒業していくのか。また、卒業後どのような進路をたどっていくのか。これらを明らかにしたうえで、現代定時制高校が果たしている社会的機能について、改めて検討してみる必要がある。

(2) 定時制高校性の心性に関する歴史的研究

定時制高校に入学する生徒の属性や生活状況については、1950～70年代を対象とする研究が近年になっていくつか行われ、当時の定時制高校生の心性の特徴が指摘されている。

小林千枝子の研究では、主に二交代勤務制をとる紡績業において中卒女子労働者の求人難が激化した1960年代半ばから70年代に、各企業がこぞって「働きながら定時制高校に通える」ことを売りにした人材獲得競争を展開し、企業が定時制高校と協力して二交代の昼間定時制課程をつくりあげていったことが示されている。二交代勤務は一週間ごとに早番勤務（早朝から午後）と遅番勤務（午後から夜間）を入れ替えるもので、昼間二交代定時制ではこれにあわせて一週間ごとに午前と午後に授業が組まれた。こうした課程は企業立ではなく公立あるいは私立で、生徒は全国から集まり、ほとんどが女子であった。そして、紡績業が衰退した80年代には次々と閉鎖されていったという¹¹。当時、女子中卒労働者を大量に雇用していた紡績業の世界では、中卒後に働く工場は実質的には結婚するまでの労働の場であった。

定時制高校の側では、事業主を生徒の保護者として位置付けていた。小林が資料とした愛知県県立起工業高校昼間定時制（1964年設置、普通科）生徒会発行の文集『歩く仲間』（1968年発行）には、生徒が学校生活を楽しいものと認識していた一方、勤務と学業を両立させることの負担は相当なもので、耐えかねて退学していく者が絶えなかったことが示されている。1964年の開校から1985年の閉校まで、卒業率は常に6～7割だったという。起工業高校昼間定時制は1972年に県立起高校として独立し単独校となったが、繊維産業の不況を背景として1975年以降は志願者減が続き、非行も顕在化するようになった。1983年に募集停止となり、1985年に閉校を迎える¹²。

小林は卒業生へのインタビュー調査もおこなったうえで、「『過酷な生活』という表現ではとらえきれない、ものごとくに一生懸命とりくむエネルギーな少女たちの生活世界が浮かび上がってくる」¹³と述べている。仕事と学業の両立は容易でないながらも、彼女たちを通学させ続けたのは「『働きながら学ぶ』ことに対する誇り」¹⁴であったという。「1960年代には定時制であれ高校に通うことが誇りになって」おり、「高校進学は特別なもの」で、「工場で働く社員たちにとって高校生は妬みの対象」だった。全日制に不合格になったために愛知に来て就職し定時制に通っていた生徒も少なくなかったが、少なくとも文集に掲載されている文章からは、全日制に入学できなかったことに対する「劣等感や引け目のようなものは認められない」¹⁵。教師の観察には、全日制の生徒に対する引け目はあったことが示されているが、生徒自身が書く文章では、こうした感情はあえてかき消されていたものと考えられる。ある生徒は、入学時に劣等感を持っていたことを認めつつ、学校生活を通じてそれを払拭し自信を得ていったことを述べている。

生徒たちが厳しい現実を生き抜くなかで抱いていた心性は、「苦難の後には、きっと喜びがある」というものだった。その「喜び」には、高卒資格を得ることによる社会移動も含まれていたかもしれないが、必ずしも「そうは自覚されておらず、むしろ、友情、優しさ、たくましさ、人間的強さ、信頼等々」¹⁶であった。こうした心性は学校の伝統的文化となり、1980年代を迎えてもなお存続していた。

また、先にも言及した前田崇の研究¹⁷は、勤労学生、勤労青年の文化を明らかにすることを通じて、戦後の人々の生き方を方向づける社会規範や生活規範の一端を描き出すことを試みたものである。全国初の企業内分教室である千葉県立船橋高校定時制課程日毛分教室(1953年4月設置)を対象として、クラス文集、同窓会誌、生活記録等の資料から生徒の生活規範を分析した。その結果明らかになったのは、生徒が「努力」「困難克服」「忍耐」「協力」などの徳目を重視していたことである。前田によれば、これらは安丸良夫が指摘した「通俗道徳」に近く、社会の仕組みや体制に人々の目を向けさせず、困難や貧困の原因を個人の精神力や道徳性へと還元してしまうイデオロギーであった。

しかし、1950年代の定時制高校生徒は、重労働や職場の無理解、偏見や就職差別などについて生活記録に綴っていたという。分析した資料には、苦しい生活を乗り越えるために「努力」「忍耐」「協力」といった規範を有した一方で、社会に対する批判的精神も持ち得たことも示されており、戦後の定時制高校生はこうした罫には必ずしも嵌っていないと前田は指摘する。

また片岡の研究でも、1960年代前半までの都市部においては、中小企業で働く勤労青少年が職場の理解を得られず定時制高校から脱落していくケースがあとを絶たなかったこと、定時制生徒に対する偏見や就職差別の存在、全日制に対する引け目が卒業後もぬぐい去れなかったことなどが指摘されているが¹⁸、片岡によれば、こうした経験を持つ労働者のなかからは、社会の矛盾に気づき労働運動に加わった者もあり、ごく少数だが弁護士を目指して夜間法学部に進学した者なども出たという。だが、そのような例がみられるのは1960年代前半までであった。それ以後、定時制高校での生活において、生徒が批判的精神を培う契機はどれほど保持されているのだろうか。こうした問いを解くうえで、現代定時制高校生の生活や意識を明らかにし、それを通じて定時制高校の現代的機能を解明することが求められるのである。

1-2 定時制高校の学校文化とその機能

高度成長期以後、定時制高校の役割が大きく変容してきたことについては、先述のとおり既に有効な分析がなされているが、90年代以降の変容についての研究はいまだ十分には行われていない。そこで、まずこの時期の学校的日常の「くずれ」(乾彰夫)について押さえたうえで、90年以降の変容を読み解くための枠組みを提示したいと思う。

長谷川裕は、学校の規律・訓練機能について論じる中で、くずれ現象を二つの側面から説明している¹⁹。第一の側面は、学歴獲得競争の激化が、競争から敗れそこから早々に離脱していく者を大量に生み出したことである。外部労働市場の下層部が拡大したことにより、離脱者には不安定ではあるものの労働機会が提供されるようになり、それが競争からの離脱を後押しする。企業社会との連結に支えられてきた規律・訓練装置としての学校の機能は、学校に将来の生活保障を求めることからオリエットした生徒たちにとってはほとんど意味をなさない。こうした説明は、普通科「底辺」高校にくずれが顕著であることともかみあっている。第二の側面は、消費文化の進展の中で自己への感覚を鋭敏にした青年たちの感性が、規律・訓練的な学校

秩序に対して鋭くズレをきたすようになったことである。学校の規律・訓練装置の規格化作用は拒絶され嫌悪の対象になるが、それを完全に拒否しそこから離脱してしまえば、社会の規格から外れ、自己を承認してくれる他者の視界から消えることになってしまう。青年たちの多くは、内面では学校秩序を忌避しつつもそこにとどまるほかなく、そうした憂鬱と倦怠が学校的日常の実質的なくずれを生じさせている。

たとえ学校的日常に耐え難さを感じていても、そこからの離脱は、社会から求められる規格化をなしえないこと、つまり完全に周辺化されることを意味する。それを免れるために、ひとまずは「高卒資格」獲得によって規格化を果たすことが目指される。かくして、学校的日常（全日制高校）から何らかの理由で離脱した（しそうなった）者は、学校的日常の構成要素である学力獲得競争と学校秩序が相対的に緩いとみなされる定時制・通信制に集まることになる。定時制高校の教師は、生徒が馴染みやすい空間づくりに腐心し、自尊心を低下させようとしている生徒を高卒資格を目指させることによって鼓舞するとともに、学級集団において仲間との共感関係を形成させ、なんとか卒業まで導こうと努力している。

とはいえ、定時制・通信制高校も学校制度の一部であり、学校組織の制度文化から完全に自由ではない。学校（教師）は生徒を規格化して社会に送り出すという課題を負っている。定時制高校が通信制やサポート校と異なっているのは、「学校らしくない」ことを特徴としながらも、時間・空間・集団・社会関係といった学校生活の秩序を大幅に崩すことなく保持している点にある。だがその中でも、教師が内面化している文化は生徒の生活や労働のリアリティを前にして揺らがざるを得ず、様々な実践知が生み出され蓄積されていく。他方、生徒たちは、自分の置かれた社会的位置や生活環境についての心理的葛藤を、学校文化に対する多様なレジスタンスによって表出し、自らの自律的な領域を確保しようとする、学校生活秩序からの逸脱のラインをめぐるこうしたせめぎあいの中で、定時制独自の学校文化が形成されるといってよい。そのダイナミズムの中で教師も生徒も変容し、このことが、定時制高校教師の実践記録や元定時制高校生の回顧録によくみられるように、定時制独自の「豊かさ」として当時者に深く印象付けられるのである。

定時制高校の卒業生や教師たちによって書かれた著作では、困難を抱えながらも互いにたくましく成長する生徒と教師の姿が印象的に描かれる傾向が強いが、そこで描かれる生徒たちの「成長」は、必ずしも希望に沿った職業生活への移行と直結するものではない。むしろそれは、学校的な生活秩序や規範的な教師に対して、様々な形で抵抗や反発を日々繰り返しながら、やがては自らの心理的葛藤となんとか折り合いをつけていくプロセスである。ここに見られる抵抗や反発を、学校的な生活秩序をつくり変える契機とみなすこともできるだろうが、多くの場合、それらは進路決定の壁に阻まれて卒業時期が近づくにつれ収束し、社会に対して異議を申し立てる動きへと展開することはきわめて稀であると言わざるを得ない。

現代の若者にとって、「強力な社会的選別機構として機能する教育制度を通過し、経済的な行為者として特定の職業へと入っていくこの移行局面は、個人が自前の社会的位置を獲得していくという意味で重要な局面」²⁰であり、学校を卒業し職業世界に入っていくことは、自前の階級的位置を獲得していくことを意味する。移行局面に投げ出された若者が自らの社会的位置を模索するための場所として、現代の定時制高校はどのような特徴を持ちうるのか。定時制高校に集まる生徒たちは、そこでどのような日々を送っているのか。以下では、筆者らが行った2つの調査結果をもとに、その具体的なありようを明らかにしていきたい。

2. 聞き取り調査にみる定時制高校像

これまで、2006年10月～2008年2月にわたって断続的に大都市および地方に所在する25校の定時制高校を対象に聞き取り調査を実施してきた。聞き取り対象者は、主として校長、教頭、生徒指導主任、進路指導主任、教務主任、養護教諭等である。本章では、地方所在の定時制高校15校での聞き取り調査結果をとりあげ、そこでは、「いまどきの定時制」はどのように語られていたか、また抱える問題は何であるのかについて描き出すこととする。

調査校の概要および特色は次の通り(表2-1)である。

表2-1. 聞き取り調査対象校一覧

校名	単独併置	単位制学年制	昼夜間	学科	特色	タイプ
A	単	単位制	昼夜	普通科	当初(1948,夜間のみ)から単独校。2002から昼間部設置。	伝統単独定時 新構想型 生涯学習センター併置
B	単	単位制	昼夜	普通科・看護科	当初(1972,定時制夜間,通信制)から単独校。1991から単位制移行と同時に昼間部普通科設置。	伝統単独定時 新構想型
C	単	単位制	昼夜	普通科(昼間2部)・生活文化(昼間1部)・情報ビジネス(夜間)	当初(1948,夜間のみ)から単独校。1968昼間部設置。	伝統単独定時 (新構想型)
D	単	単位制	昼夜	昼間Ⅰ部(普通科・情報ビジネス) 昼間Ⅱ部(情報ビジネス・生活文化) 夜間(普通科・国際教養)	当初(1961)から単独校。1969昼間部設置。1992単位制。県民カレッジ地区センター併設。2004から新校舎(駅前高層ビル内)。	伝統単独定時 (新構想型) 生涯学習センター併設型
E	単	単位制	昼夜	総合学科	統合設置,中高一貫	新構想型 擬似全日制タイプ。 定時制であることをアピールしない
F	単	単位制	昼夜	総合学科	統合設置	新構想型
G	単	単位制	昼夜	普通科	2005に元専門高校を改編して設置。多部制。	新構想型 擬似全日制タイプ 定時制であることをアピールしない
H	単	単位制	昼	総合学科(昼間2部)	1966通信制,2001定時制(昼間部)設置。元専修学校。私立。	新構想型
I	単	単位制	昼	普通科(昼間2部)・総合福祉(昼間1部)	県民カレッジ地区センター併設。女子高を閉校し,2001開校。	新構想型 生涯学習センター併設型
J	併	学年制	夜	商業科	旧タイプ	伝統・専門型
K	併	学年制/単位	夜	機械・電気・建築・土木	旧タイプ。2007から単位制。	伝統・専門型
L	併	学年制	夜	普通科	旧タイプ	伝統・普通科型
M	併	学年制	夜	普通科	旧タイプ	伝統・普通科型
N	併	単位制	夜	普通科	統合設置	伝統・普通科型
O	併	学年制/単位	夜	普通科	旧タイプ。2007から単位制。	伝統・普通科型

A～Oの15校は、その特色（設置形態、改革の有無等）から大きく2つのタイプに分けることができる。90年代以降に高校改革で誕生したケースによく見られる、いわゆる新たなタイプ（昼間部、もしくは昼夜間の多部制で単独設置）の定時制高校と、従来から典型的にみられる全日制に併設された夜間定時制高校である。本稿では、前者を「新構想型」、後者を「伝統型」としておく。新構想型では、総合学科の設置がひとつの特徴としてあらわれている。また、一般市民向けの生涯学習センターを併設する高校もある。なかには、いわば「擬似全日制」を目指している高校もあり、そこではその学校が定時制であることは極力語られず、高校のパンフレット等でも定時制であることが書かれていないほどにアピールされていない場合が共通して見られた。つまり、「この学校は定時制ですか」と問わなければわからないほどである。伝統型の定時制が学費の安さ、柔軟な時間割、高卒の資格をとる、働きながら学べる、といったことをいわば「売り」にしているのとまったく異なり、高等教育進学を目指した指導を前面に出している。

さて、新構想型と伝統型それぞれでは、どのような生徒のどのような日常があるのだろうか。

2-1 新構想型定時制高校

新構想型はA～I校である。そのうち、A～D校は設置時期も古く、当初から単独定時制であった。設立期は夜間部定時制としてスタートし、やがて昼間部も設置している。ここでは仮に「伝統・単独定時」の新構想型と呼ぶこととする。昼間部設置時期をみると、A、B校は90年代以降の高校改革の下で誕生したE～I校と同じく、いわゆる新たなタイプの高校の設置期と重なっている。C、D校は昼間部設置が1968、1969年と早い、ともに地場産業との結びつきが強い地域にあることの影響が強い。たとえばC校はなるべく勤労青年（たとえば3交代勤務従事者）が学べる時間帯を、という経緯で昼間部も設置されている。C、D校をのぞいて、共通点は90年代以降の高校改革下で誕生した多部制（もしくは昼間部）の定時制であるということである。この時期の定時制は、学力問題、不登校経験、中退経験など多様な背景を持つ生徒たちを対象として「制度的に」転換した時期と言える。つまり、先に定時制高校の転換期は二度あるのではないかと述べたが、90年代の転換期は単位制、3修制、多部制の導入からみて、伝統的な定時制高校のまま多様な生徒の受け皿となったと見られる70年代と異なり、定時制が制度的な役割の転換を始めた時期である。C、D校も当初の設置意図とは異なるが、昼夜間の多部制であることから、結果的に受け入れ生徒層はこの制度的な役割転換期の定時制と重なっている。では、新構想型の定時制高校の実態を聞き取り調査から抽出してみる。

(1) 「伝統・単独定時」の新構想型

入学してくる生徒層として語られるのは3つのタイプがある。不登校経験者、低学力者、問題（逸脱）傾向の生徒である。不登校経験が3分の1で低学力者が3分の1とする学校もあれば、不登校経験が少ないときでも5割、「不登校の子が受けてもとってくれるということが定着」したと語る学校もある。この点からも新構想型定時制が不登校経験者の受け皿になっていることが明白になる。この不登校経験の生徒たちが多いことを、「不登校の生徒が多いので強く出られないのがもどかしいところ」と生徒指導の抱える問題としてあげる学校もある。かつての逸脱傾向生徒を主に対象とした生徒指導と異なり、複合化した生徒指導が求められているが、なかなか解決策を見つけられないでいる教師たちがそこにみられるのである。

入学希望については、昼間部が夜間部よりも一般的に合格が難しいが、昼間部であっても「ここにしか来られなかったからきた生徒」、「中学校の頃に行けないという事実が覆いかぶさっている。その中で行ける高校を探す。不登校とか問題行動。全日へ行きたいとなるが、行ける高校を探す」、「昼間が行ってもだめだから夜間に行く。夜間のほうが問題行動の子が多い」といった具合に、低学力、不登校、問題行動によって、全日制へ進学できなかった生徒たちが入学してきているという認識が強い。さらに、他高校からの転入(全日制などからの転入)、中途退学による編入の生徒が転編入枠いっぱい毎年入ってくるという場合も多い。つまり、多様な背景を持つ生徒にとって、「ここにしか来られなかった」という状況である。さらには、定時制からもしき出されざるを得ない層の生徒は「通信制へ転出」していくという。

こうした生徒たちの家庭の経済的状況は良くない。「昼間部は全日制に近いが、夜間部はきびしい。生徒が家計を担っている場合もある。親に連絡がとれない」といった状況が語られる。さらに、「子どもが学校へ行きたいけど、親が払ってくれない。自分(生徒)で働けばいいのに、それができない。親も(それを)言えない」と語る学校もあった。同じ語りは、後に述べる新構想型ではない「伝統型」の定時制でもあった。働きながら学ぶという伝統的な定時制の役割はその点でも成立してはいない。

新構想型A～I校はいずれも単位制である。単位制は学年制と異なり、留年がなく単位の積み重ねで卒業できるため、学年制よりも卒業しやすく、多様な背景を持つ生徒にはプラス効果(卒業しやすさ、クラス編成の柔軟さ、時間割の多様さ)があるとされる。単位制高校は1988年から定時制・通信制課程でまず導入され、1993年から全日制課程へと拡大された制度であり、当初から多様化する定時制・通信制の生徒層に向けた施策でもあったと言える。この単位制が逆に学力間格差の大きさや生徒指導に対応するにはマイナス効果であると指摘する学校も「伝統・単独定時」にはある。たとえば、「単位制の弱点のなかで、必要な授業をとる。高めていくという意欲は弱いです。まあ安易にこうやれば卒業できるよという処世術を教えるようになる。逆に学習意欲を高められない。持っている力に差がありすぎるので、高い授業をすると下がついて行けず、下にあわせると上がお客さん。上が下を教えてくれればいいが、人間関係を作るのが苦手。入学は楽でも、人間関係をつくる力をつけるのが大事。ここにきて特別支援(の必要な生徒)が6人入ってきている。そこをどう教えるか。その周りで教員があたふたしている。不登校と転編と特別支援。教員は的をしぼれん」という語りからそれがわかる。学年制から単位制に移行していく過程を「学校が溶けていく」と表現した教師もいたという。多様な生徒層に、多様化をめざした制度の組み合わせは、教師たちにますます多様な対応を迫り、教師は追い込まれているのである。

では、進路はどうなっているのだろうか。定時制高校の場合、進路先データの特色としてよく見られるのが、進学・就職・その他のうち、「その他」の多さである。進路未定の場合が多いが、「高校へ来られただけでよい。それも卒業できたので仕事までは、という家庭もある」と語る学校があったが、この傾向は都市部を含めた他の定時制高校の聞き取り調査でもよくあった。特に不登校経験者の生徒の場合、その思いは強いようである。進路指導については、「その他」を減らそうと進路指導をしているが、まだ社会へ出る準備ができていないのではないかという意味で「しかし、これでよいのか、と思っている」場合や、離職率の高さ、離職までの早さが指摘される場合が多い。また、「伝統・単独定時」の場合、後に述べる新構想型ではない「伝統型」定時制の進路指導から抜け出せず、「古い定時制だから進路指導はない。新しい定時制のほうが

いい。高校も変わらないといけないが」と語る学校もあり、結果として「新構想型」の制度的役割を担うことになったが故に、「伝統・単独定時」は「伝統型」からの転換が難しい場合もあることがわかる。

(2) 新構想型

90年代以降の高校改革の下で、全日制の統廃合や全日制専門高校からの多部制定時制への転換といった経緯を持つのがこの新構想型の特色である。また、総合学科を設置している場合が多いのもこの型である。この型には、いわゆる「擬似全日制」を目指す高校もある。それらは、都市部では前章にもあるように「チャレンジスクール」「エンカレッジスクール」「クリエイティブスクール」という名称が用いられ、従来の全日制でも定時制でもない折衷型の第3のタイプとも言える学校であり、不登校経験者のなかでも学力上位層が比較的多く、卒業後は就職よりも進学を目標とし、それに耐えうる生徒を集めている場合が多い。今回の調査では、E、F、G校がやや「擬似全日制」に近いタイプであった。このタイプでは、高校が定時制であることを積極的には出さず、生徒も定時制というイメージがあまりない場合や、単に「多部制単位制」とうたっている場合がみられた。たとえば、「昼間部というのは定時制のシステムを使っているが、全日制と変わらない。メリットは授業料が安い。朝から来て、クラブ活動まで、制服もあって。クラブも全日制の大会に出ていますので、定時のいろんな大会にでるのは、夜間と通信。何かの単位を落とす、落としたり夜間とか通信でとれる。だからすごく制度をうまく活用している」と、従来の定時制ではないことが積極的に語られるのである。前史が全日制高校である場合、高校改革政策で定時制高校に転換するということが自体がやはり「負の烙印」であるようである。そこから逃れるためには、「全日制と変わらない」ことが「売り」になる。さて、実態はどうであろうか。

「全日制と変わらない」ことを比較的良く展開している高校では、「生徒指導の問題は少ない。生徒はおとなしい」、中退者も数名程度であった。そして、進学に力を入れていることや就職も100%(2006年聞き取り時)である状況が語られる。「全日制と変わらない」ことを目指しているが、同時に一方で、学力格差や不登校経験者について何らかの問題を抱える学校では、「一番近くにありながら、一番行きたくない学校だった。名称変更(全日制から多部制定時制へ転換を指す)したとき、60人入れば20人は(学力が)高い。20人は低い。しかも単位制。小・中に不登校の子も入ってくる。(1年目は)60名のうち15名は不登校の子が入ってくる。学力の差あり、意欲の差ありで高校のカリキュラムが組めない。トレーニング科目(国数英)を作って、そういう授業を意図的に取らせています。すごく少人数でやっています」と語る。この学校は地方のなかでも農漁村部に位置するために、地理的にも通学可能範囲の生徒は限られている。それだけに地域との連携を、求め、求められるところに高校の役割と存在意義を見いださざるを得ない状況であった。

また、統廃合の結果設置された学校は、役割を新しいニーズ(不登校経験、働きながら学ぶ、中学からの生徒の進路保障)に応える学校であると捉え、教育相談・進路指導・生活指導の「この3つをいっしょにやらないとやっていけない生徒たちがいるだろう」と語っている。たとえば、話すことができない生徒がいても「進路指導で初めて話せないことがわかる。親が障害を認めない」ケースや、卒業後のフォローが必要な生徒がいたり、家族がいない生徒の場合、就職先として「引き取られ先に居場所がないので、寮のあるところを探す場合もある」ケースで

ある。また、家庭の経済状況についても、専門学校受験のときに親に授業料等について説明してあっても、合格後に学費が払えなかった例が聞き取りでは挙げられていた。進路についても、「生徒が卒業すると、(生徒が)外では『かまってくれませんか。おいていかれるんだよう』という」と語り、「(この)先生はやさしいので、外はちがう。それを外へ行って知る」という。つまり、生徒のフォローは際限なく続き、それを教師たちは自らに課そうとしている。この学校では生徒指導の教師が「昼間部、夜間部、会社の生徒の3つの学校がある感じ。生徒指導を一つのやり方でするのは難しい」と語っている。

このように、「全日制と変わらない」を目指しても、地方では設置できる高校数には限りがあるため、都市部のように入学者に特定の生徒層をすくい取ることは必ずしも容易ではない。それは「擬似全日制」だけではなく、新構想型定時制高校が「新構想」ではあるが、完全な「新構想」ではなく、全日制に進学して卒業していく生徒層以外はどのような背景を持った生徒でも引き受ける、いわば「オール・イン・ワン」型の役割を果たさなければならない場合が多いことを示唆している。

2-2 伝統型定時制高校

J～O校は、全日制に併設された夜間部のみの従来型の定時制高校である。新構想型に比べると、中退経験者が多く、不登校経験者の割合は1～2割程度と少なく、低学力層が大きく、中退率が高めであるという認識傾向が聞き取りではみられた。問題行動の大きさについての捉え方は学校によりさまざまであるが、高校よりも中学で荒れているという指摘もある。「おとなしくなっている部分もあると思います。簡単にランクづけしたときに、そういう同じような感覚の子も入ってきて。けれども変わっていきますので。6年前にこの辺に(校内)バイク乗り回して、いわゆるヤンキー・暴走族がいたんで、いつでも。これを知ってる者からしたらすごい変わってるんですけど。高校は荒れたと言ってもそれほどでない。荒れるのは中学校。その子らが1～2年たって落ち着いて入ってくる」と語られる例である。

入学する生徒層は、たとえば「新卒、ピカピカ1年生が半々か、半分強ですね。あと、全日の中途退学とか、浪人ですね。(中略)今年の状況をいいますと、転編入で42人入っています」という学校や、「中退が多いですね。半数くらい。他の定時制をやめてということはまずない。他の全日制をやめてすぐ入ってくる。1年生をクリアしないで、すぐにくる」という学校のように、転編入の生徒が多い。また別の学校では、入学時に72人であった3年生は現在40人に減っており、しかも学年途中での転編入学者が含まれているため、実質的に中退者がかなり多い学校もあった。中退理由は友だちとうまくいかないなどさまざまで、時期は1年生の終わりが多いとのことであった。この学校では「目標がない、だるい」と教師は生徒の雰囲気語っている。また、教師生徒間の関係は密であるとし、養護教諭は「生徒にとって実家のような感覚、もうひとつの家族。卒業だということは、戻ってくるのではなく、もう、ひとりでやることだと言っているが」と語る。別の高校では、現代の定時制の必要性について尋ねた際に、「子どもとしては全日へ行けないので。親も何とか出したい。2年ぐらいたったら世の中のことがわかります。そこから先は自分で。いつ、大人になるかですよね。親も言えなくなっていますので。そのままの状態であるので。それを待つのが大変ですね、教師は」と語る教師がいた。中学卒業後の進路保障、居場所、低学力、中退、問題行動と、抱える課題は多いが、家族のように接する教師たちが彼らをつなぎとめているようにも見えるのである。この点は、上述のよ

うに「オール・イン・ワン型」の役割を求められる新構想型定時制高校との共通項であるかもしれない。

3. 質問紙調査にみる定時制高校の役割

本章は、定時制高校が現代日本においてどのような役割を果たしているのかを、高校生及び教員を対象とした質問紙調査をもとに明らかにすることを目的とする。調査対象は3地方都市（人口10万～50万人規模）の定時制高校・通信制高校及び比較対象として各地域の全日制普通科高校を、各都市数か所ずつ選定し、生徒調査では2年生全員、教員調査では構成員全員を対象として、郵送により調査を行った。地方都市を対象をしぼったのは、後に述べる入学者の多様化の影響を強く受けることが想定されたからである²¹。この調査は2009年2月に実施されたものであり、定時制高校の再編が進む中で、定時制高校の役割をどこに見出すべきなのかを明らかにするために行われた調査の一つである。その結果計12課程（1地域から4課程）から回答を得た。内訳は、定時制5課程、通信制3課程、全日制4課程である。

さて定時制高校は1970年代、そして1990年代²²に大きくその役割を変えてきた。それはたとえば「終焉」²³として語られもしたのだが、戦後の定時制高校がすでに農村と地方都市と大都市ではその機能が異なっていたことを考えると、はじめから〈終焉〉していたとも言える²⁴。とはいえすでに数の上で支配的であった役割から別の役割へと変わることは、支配的であった役割の「終焉」ではある。では何が終わったのか。仮説的に提起したい。

表 3-1. 定時制高校入学者の特徴

	中学校で不登校を経験した者の占める割合		高等学校退学者の占める割合		
	度数	割合(%)	度数	割合(%)	
ほとんどない	5	1.5	ほとんどない	29	8.4
10%未満	6	1.8	10%未満	108	31.3
10%以上 25%未満	74	21.6	10%以上 25%未満	145	42.0
25%以上 50%未満	153	44.7	25%以上 50%未満	55	15.9
50%以上 75%未満	96	28.1	50%以上	8	2.3
75%以上	8	2.3	合計	345	100.0
合計	342	100.0			

表 3-2. 定時制の役割について

	(%)				
	強く そう思う	そう思う	どちらとも 言えない	そう 思わない	全くそう 思わない
高等学校定時制課程は、勤労青少年の教育 機会の拡大に貢献している。	11.6	45.2	26.0	14.9	2.3
高等学校定時制課程は、勤労青少年の機会 拡大というよりも、低学力者の救済機関として の役割の方が大きくなっている。	28.3	47.6	20.1	4.1	0.0
高等学校定時制課程は、中学校時代の不登 校経験者を受け入れる場になっている。	26.0	60.9	9.8	3.3	0.0
高等学校定時制課程は、成人の教育機会の 拡大に貢献している。	5.9	47.2	30.9	13.7	2.3

地域により前後はあるが、1960年代後半～70年代に勤労青年の教育の場を主にすることが終わり、1990年代には全日制高校から排除された逸脱青年の教育の場を主とすることが終わったのだ。表 3-1²⁵は2006年2月に行った調査結果である。これは全国の定時制高校（776校）を対象として、390課程（48.1%）から回答を得たものであるが、不登校経験者が多くを占める現状が示されている。同じ調査で、教員自身も定時制課程の意味を勤労青少年から、低学力者及び不登校にシフトしていることが読み取れる（表 3-2）。むしろ勤労青年や逸脱青年がいなくなったわけではなく、現在でも一定数が定時制高校を利用している。しかしそれらの青年が

主であるとは言い切れない状況がひろがり、現在では不登校・発達障がい・ニューカマー・高齢者など様々な課題を抱えた利用者が混在している状況となっている。一言でいえばそれは多様化とすることができるが、しかしそれは単に多様化しているのではない。

第1にいずれも全日制高校からは排除された層、つまり周縁に位置する層であること。第2に、まんべんなく多様化しているのではなく、定時制高校自体が多様化している、つまり定時制高校が分化しているということ。たとえばいわゆる新しいタイプの昼間定時制高校は、生徒や地域住民が持っている従来からある定時制のイメージを払しょくするために、定時制高校であることを表明しない。第3に、通信制高校や私立高校との競合あるいはすみわけが生じているということである。第2、第3の点については、地域の状況に依存するところが大きいであろう。また近年、定時制高校では、主に経済的状況の悪化から神奈川や大阪など都市部を中心に入学希望者が増加する傾向があり、経済的貧困を直接的な理由とする入学者が増加する可能性もある。

以上の仮説にそって、第1章では生徒調査の結果概要を、属性や入学の動機から記す。第2章では教員調査の結果から各高校の特徴に基づいて分類し、第3章では生徒類型を行ったうえで、教員調査の結果との関係性を分析する。そして最後に、現在定時制高校が生徒にとってどのような場として出現し、教員はそれに対してどのような対応を行っているのかについて検討する。

3-1 定時制高校生の姿

調査対象となった学校を生徒の姿から確認していく。以下表は、上から全日制普通科(3校)、全日制専門学科(1校)、定時制普通学科(2校)、定時制総合学科(2校)、定時制専門学科(1校)、通信制(3校)それぞれの割合を示すこととする。なお定時制専門学科はサンプル数が10人未満のため参考値としたい。

表 3-3. 学校別、性・年齢割合 (%)

	女	男	無回答	16歳	17歳	18-20歳	21-24歳	26歳以上	無回答	総計
全普 A	51	46	3	90	2	1	0	0	7	100
全普 B	62	37	1	100	0	0	0	0	0	100
全普 C	51	47	2	93	2	1	0	0	5	100
全専	2	98	0	92	1	0	0	0	7	100
定普 A	71	28	1	88	4	0	0	0	7	100
定普 B	45	50	5	64	18	5	2	2	9	100
定総 A	60	40	0	73	20	3	0	0	3	100
定総 B	67	30	2	89	2	0	0	0	9	100
定専	17	67	17	33	0	17	17	17	17	100
通信 A	71	29	0	36	31	17	5	7	5	100
通信 B	49	46	5	32	27	15	12	12	2	100
通信 C	60	35	5	42	17	16	9	7	9	100
総計	48	49	2	59	6	3	2	1	5	100

まず学校別の性別構成では、全日制専門学科が男性で占められており、通信制課程は女性割合が多くなっていることを確認する必要がある。また年齢は、全日制においてはほぼすべてが16歳であり、定時制の8割、通信制の3割強と大きな違いを見せている。高等学校中退者や不登校のため通常よりも遅れて入学してくる生徒の多いことが推察される。なお定時制でも学校によっては全日制とほぼ変わらない割合を示している学校もあり、果たす機能の違いが想定できる。

表 3-4 に中学校時の成績の割合、表 3-5 に現在の高校を選んだ理由の割合を示した。これら

中学時の成績と進路希望からは、「全日普通—全日専門—一定時・通信」という序列が確認できるが、上位層に限れば定時制普通科と通信制は全日専門同じ割合を示している。これは不登校経験者に成績上位の者が比較的多いことも一因となっており、定時普通・通信での進路指導の多様化・複雑化を示唆するものである。高校選択の理由として、全日制を選ぶ生徒は「自分の学力に合っていたから」と回答し、通信制を選ぶ生徒は「学び方が自分に合っていたから」「働きながら通えるから」という理由を選ぶことが多いのに対し、定時制は理由が分散している。これもまた定時制高校進学者の多様化を示す結果となっている。

表 3-4. 学校別中学校時の成績 (%)

	上位	やや上位	ほぼ平均	やや下位	下位	記入ミス	無回答	総計
全普 A	3	1	32	45	19	0	0	100
全普 B	8	57	31	3	0	0	1	100
全普 C	1	10	32	40	17	0	0	100
全専	2	10	44	36	8	0	0	100
定普 A	1	7	16	46	28	0	1	100
定普 B	2	7	14	41	34	0	2	100
定総 A	0	0	27	43	30	0	0	100
定総 B	0	3	27	44	25	0	1	100
定専	17	0	17	33	33	0	0	100
通信 A	0	5	24	36	36	0	0	100
通信 B	2	7	39	27	24	0	0	100
通信 C	3	12	30	28	23	1	3	100
総計	3	19	32	30	15	0	1	100

表 3-5. 学校別高校選択の理由 (%)

	自宅に近かったから	自分の学力に合っていたから	学費が安かったから	友だちと同じ学校だから	学び方が自分に合っていたから	働きながら通えるから	雰囲気自分にあったから	その他	その他(部活)	記入ミス	無回答	総計
全普 A	29	56	1	1	0	0	2	8	3	0	0	100
全普 B	5	64	1	2	5	0	12	4	6	0	0	100
全普 C	12	24	3	1	12	1	5	20	22	1	1	100
全専	18	42	2	3	13	0	7	8	6	0	0	100
定普 A	1	19	19	1	26	19	7	6	0	0	0	100
定普 B	5	16	14	5	7	27	14	7	0	5	2	100
定総 A	0	23	20	7	3	13	17	10	0	3	3	100
定総 B	26	18	15	3	11	9	7	7	0	3	1	100
定専	0	50	0	0	17	33	0	0	0	0	0	100
通信 A	0	10	7	2	45	24	7	2	0	0	2	100
通信 B	5	5	2	2	27	41	7	7	0	2	0	100
通信 C	2	10	11	1	24	37	10	2	0	3	1	100
総計	12	37	5	2	12	9	8	8	6	1	1	100

表 3-6. 学校別卒業後の進路希望 (%)

	四年制大学	短期大学	専修学校・各種学校	就職	アルバイト・フリーター	家業・家事の手伝い	その他	記入ミス	無回答	総計
全普 A	19	19	39	19	0	0	4	1	1	100
全普 B	84	7	7	2	0	0	1	0	0	100
全普 C	26	5	37	27	1	1	3	0	0	100
全専	14	1	14	67	1	0	2	0	0	100
定普 A	10	9	49	28	1	0	3	0	0	100
定普 B	2	0	25	41	16	0	7	7	2	100
定総 A	10	17	27	40	0	0	7	0	0	100
定総 B	6	7	24	55	4	1	1	1	1	100
定専	17	0	17	50	17	0	0	0	0	100

通信 A	14	0	21	33	14	2	14	0	0	100
通信 B	12	7	29	37	2	0	10	2	0	100
通信 C	17	3	20	33	7	2	14	2	2	100
総計	32	6	23	31	2	1	4	1	1	100

表 3-6 は学校別の進路希望である。全日制のなかでも〈全普 B〉は四年制大学を 84%が希望しており、いわゆる進学校であることが分かる。〈全専〉で最も就職希望者が多くっており、定時制・通信制よりも就業に対する意識が強いことが予想される。定時制のなかでも〈定普 A〉は就職希望者が少なく専修学校・各種学校を希望する者が多い。この点に限って〈定普 A〉は〈全普 C〉との違いはほとんどないといってもよい。一方〈定普 B〉は就職およびアルバイト・パート希望率が高くなっている。通信制は定時制よりも若干であるが四年制大学志望が多く、逆に就職希望が少ない。

表 3-7. 学校別不登校経験（中学時）、仕事（アルバイト）経験、塾・予備校経験（%）

	不登校経験(中学時)				仕事(アルバイト)経験						塾・予備校経験					
	ある	ない	無回答	総計	いつもしていた	ときどきしていた	あまりしていない	全くしていない	無回答	総計	いつもしていた	ときどきしていた	あまりしていない	全くしていない	無回答	総計
全普 A	2	98	0	100	6	24	3	67	0	100	2	2	1	94	0	100
全普 B	5	95	0	100	1	2	2	96	0	100	29	25	3	42	0	100
全普 C	5	95	0	100	7	10	5	77	1	100	3	5	2	90	0	100
全専	3	97	0	100	9	16	7	68	0	100	3	3	1	92	0	100
定普 A	46	54	0	100	41	24	7	25	3	100	1	1	0	96	1	100
定普 B	34	64	2	100	48	25	7	18	2	100	0	0	0	98	2	100
定総 A	43	53	3	100	23	40	10	27	0	100	7	0	0	93	0	100
定総 B	12	85	2	100	58	16	4	20	1	100	1	1	2	94	1	100
定専	17	83	0	100	67	17	0	17	0	100	17	0	0	83	0	100
通信 A	69	31	0	100	60	19	5	17	0	100	0	2	2	95	0	100
通信 B	37	63	0	100	46	22	0	32	0	100	2	0	0	98	0	100
通信 C	39	59	2	100	50	25	10	11	3	100	2	3	2	89	3	100
総計	15	84	1	100	20	15	5	59	1	100	9	8	2	81	1	100

表 3-7 は、学校別不登校経験（中学時）、仕事（アルバイト）経験、塾・予備校経験を示したものである。はじめに述べたとおり、定時制・通信制に不登校経験者が多く、〈定総 B〉を除いて 3 割以上の経験者が在籍していることが分かる。特に〈通信 A〉は 7 割に不登校経験があることが注目される。

仕事（アルバイト）経験では、「いつもしていた」と答えるものが定時制・通信制に多いものの、約半数にとどまり、それぞれ 2 割程度は全く仕事（アルバイト）をしていない。勤労青年の教育機関としての存在意義が問われる部分でもあるのだが、この数字だけを見れば依然として勤労青年のための教育機関として機能していると考えられ、また働くことをてこに生徒へ働きかけることが可能であるように思われる²⁶。一方全日制では、進学校である〈全普 B〉はほとんどが仕事をしていない。その代わりというわけでもないが、〈全普 B〉は通塾率が高く、他校とは大きく異なっている。

3-2 教員から見た定時制・通信制高校生

本章では教員調査から、生徒の様子について尋ねた 16 項目の結果を用いて学校を類型化し、課程との関連を見ることで、現代における定時制・通信制高校の役割に迫りたい。表 8 は勤務校の生徒の様子について 5 段階で尋ねた結果を「あてはまる」を 5 点、「あてはまらない」を 1

点として平均得点の高い順にそれぞれの割合を示したものである。なおこの教員調査では、〈全普B〉校は調査項目が異なるため分析から省いている。また〈定普A〉と〈通信A〉、〈定総A〉と〈通信B〉は教員の区分ができず、教員調査の結果については、同じ高校として処理をしている。

表 3-8. 生徒の様子

(%)

	あてはまる	ややあてはまる	どちらとも言えない	あまりあてはまらない	あてはまらない	無回答	総計
生徒たちの習熟度の差が大きすぎる	51	36	11	2	0	1	100
低学力の生徒が多い	45	29	19	5	1	1	100
家庭での悩みを抱えている生徒が多い	36	37	15	3	0	8	100
不登校(または経験者)の生徒が比較的多い	34	23	20	17	5	1	100
授業中、私語をする生徒が多い	21	27	16	23	12	1	100
先生と友だちのようにつきあおうとする生徒が多い	18	43	19	9	2	8	100
従順で素直だが、幼稚さの残っている生徒が多い	9	43	34	10	3	1	100
他人に無関心な生徒が比較的多い	8	33	37	15	6	0	100
生徒たちは学校行事に熱心に取り組んでいる	8	32	34	21	5	0	100
他の生徒から浮きあがっている生徒が多い	5	32	33	23	6	1	100
校則に違反することがあるが、生活力の旺盛な生徒が多い	5	25	36	26	7	1	100
生徒の自傷行為がある	9	32	15	22	21	0	100
他の生徒とはなじまないが、しっかりとした考えを持っている生徒が多い	2	20	47	24	6	1	100
性的トラブルに巻き込まれている生徒がいる	4	11	35	25	24	1	100
いじめが比較的多い	0	5	26	46	22	1	100
校内暴力等のトラブルが比較的多い	1	8	14	36	41	0	100

表 3-9. 生徒の様子 (因子分析)

	脱社会因子	反社会因子	順社会因子	学力問題因子	非社会因子
生徒の自傷行為がある	0.869	-0.055	-0.019	-0.132	-0.018
性的トラブルに巻き込まれている生徒がいる	0.790	0.199	0.105	-0.213	-0.102
不登校(または経験者)の生徒が比較的多い	0.724	-0.119	-0.132	0.201	0.076
家庭での悩みを抱えている生徒が多い	0.602	-0.049	0.114	0.191	-0.085
いじめが比較的多い	0.042	0.888	0.033	-0.244	0.121
校内暴力等のトラブルが比較的多い	0.007	0.807	-0.100	-0.016	0.187
授業中、私語をする生徒が多い	-0.103	0.536	0.051	0.313	-0.252
従順で素直だが、幼稚さの残っている生徒が多い	0.046	-0.066	0.670	0.046	0.091
校則に違反することがあるが、生活力の旺盛な生徒が多い	0.010	0.074	0.545	0.125	-0.007
他の生徒とはなじまないが、しっかりとした考えを持っている生徒が多い	0.081	-0.072	0.391	0.010	0.229
生徒たちは学校行事に熱心に取り組んでいる	-0.106	-0.048	0.339	-0.220	-0.185
生徒たちの習熟度の差が大きすぎる	-0.120	-0.158	0.067	0.604	0.198
低学力の生徒が多い	0.264	0.098	-0.007	0.567	0.048
他人に無関心な生徒が比較的多い	-0.100	0.178	0.094	0.256	0.646

因子抽出法: 主因子法 回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

因子相関行列	1	2	3	4	5
1	1				
2	0.018232	1			
3	0.120646	-0.10541	1		
4	0.319484	0.456206	-0.05442	1	
5	0.287813	-0.25963	-0.11785	-0.22677	1

このデータを用いて因子分析 (SPSS 14.0) を行った結果が表 3-9 である。因子の命名には大谷²⁷⁾の若者の4類型を利用した。簡単に説明しておけば、この分類は若者を2つの軸——縦関

係への適応と横関係の適応——による4象限で分類し、両方に適応的である者を順社会、縦関係のみ適応的である者を非社会、逆に横関係のみ適応的である者を反社会、両方に適応的でないものを脱社会としてまとめたものである。因子分析の結果5つの因子が抽出され(固有値1以上)、上記の4つに学力問題を示す因子を加えて表にある通り命名した²⁸。

ここで得られた因子得点をもとに、クラスター分析を行い5つのクラスターを得た。図1の左から、非社会以外の問題を多種抱える「問題混在型」(70名)、脱社会・非社会因子が低く生徒同士の(横の)関係性は活発と考えられる「仲良し型」(44名)、順社会が低く反社会と学力問題を抱える「荒れ型」(30名)、仲良し型とは逆に生徒同士の関係性が薄い「無関心型」(59名)、問題が少ないが非社会傾向だけはあはる「問題少型」(41名)と判断した。

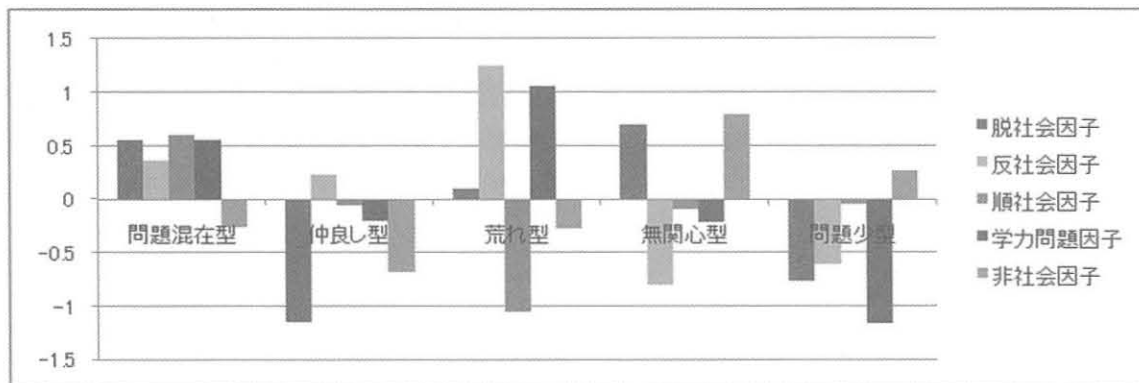


図 3-1. 問題型類型

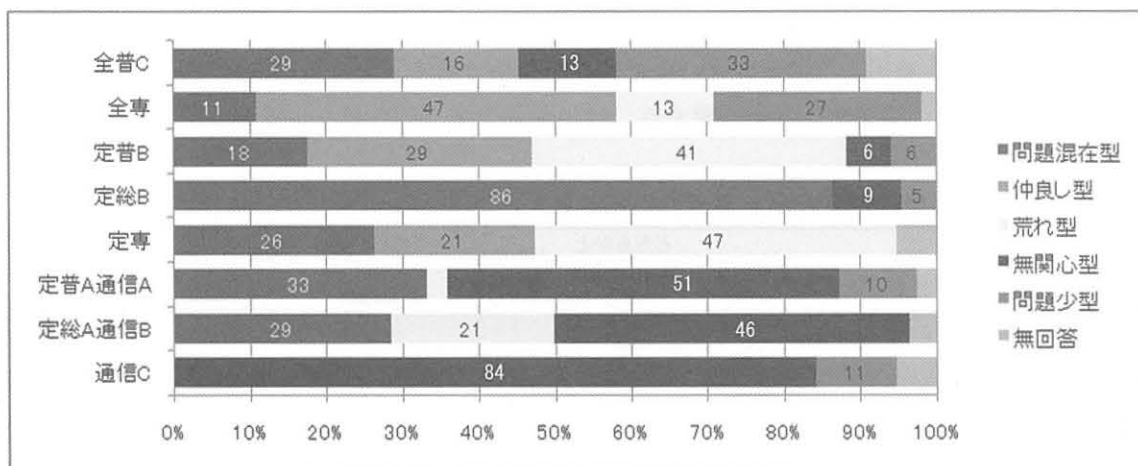


図 3-2. 学校別問題型類型

図 3-2 は上記の問題型類型を学校別に割合を示したものである。まず全体的に目につくのは、通信制を持つ学校では無関心型が多いことである。また問題少型はほぼ全日制の教員によって回答されている。荒れ型は、従来定時制に見られたであろう類型であるが、本調査では〈定普B〉〈定専〉、そして〈通信B〉の影響を除けばおそらく〈定総A〉に限られる。同じ定時制であっても〈定普A〉〈定総B〉は問題混在型として認識されている。〈定総B〉は2部制の定時制高校で、制服があり、偏差値も表示されている²⁹。本調査でも不登校経験者割合も少なく、年齢もほぼすべてが16歳であり、高校選択の理由も自宅に近いことがあげられる。昼間部に限っては全日制の高校と実質的に同じであると考えてよい学校である。この〈定総B〉では、ほとんどの教員が一致して問題混在型であると認識している。

〈全普C〉では教員の評価が割れているが、他校との比較のなかでは問題少型が最も多く、相対的には問題が少なくと認識されている。問題少型が2番目に多い〈全専〉は、仲良し型が最も多く、比較的活発であると認識されている。

〈全普C〉〈全専〉とも全日制のなかではいわゆる困難校として位置づけられる可能性のある学校であるが、定時制・通信制との比較の中では全日制は問題少型・仲良し型と位置づけられ、定時制は問題混在型か荒れ型、通信制は無関心型と考えることができる。

3-3 定時制高校生の意識類型

前章まで、課程によって、また学校によって一定の傾向があることを確認してきたが、それぞれの課程・学校によって生徒が一様であるわけではない。本章では生徒の意識類型を捉えることで、学校の内部における多様性と特徴を明らかにしたい。まず比較的共通する意識について取り上げる。表は「現在の学校が好きですか」「学校に行きたくなくなることがありますか」「あなたの未来」の学校別の割合である。学校が好きかどうかについては「好き」と答える生徒が〈全普B〉に多く、〈全専〉に少ないものの、課程によらず「好き」「どちらかと言えば好き」と答える生徒が多い。反対に「学校に行きたくなくなることがありますか」と聞いた質問でも、〈全普B〉に「よくある」という回答が少ないものの、一貫した差は見られない。学校が好きかどうか、また学校に行きたくないかどうかは学校内における相対的な位置によるのではないかと推察される。また未来展望についても〈全普B〉が高いものの、一貫した傾向は見られない。

さて本章で分析の中心となるのは、13項目について「高校生の間にやりたいと思っていることはどんなことですか」と尋ねた設問である。表は「そう思う」を5点、「そう思わない」を1点として平均点を算出し、得点の高い順に並べた結果である。上位の「友だちと仲良くなる」「趣味を楽しむ」「様々なことを経験する」は半数以上が「そう思う」と答えている。

表 3-10. 高校生の間にやりたいと思っていること (％)

	そう思う	どちらかと言えばそう思う	どちらとも言えない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない	無回答	総計
友達と仲良くなる	58	22	15	1	2	1	100
趣味を楽しむ	50	29	18	1	1	1	100
様々なことを経験する	51	29	16	2	2	1	100
たくさん遊ぶ	42	28	23	3	3	1	100
ゆっくりとする	39	28	25	3	4	1	100
進学のための勉強をする	38	26	23	4	6	2	100
就職のための資格をとる	30	26	32	5	6	1	100
仕事(アルバイト)をする	30	23	29	6	11	1	100
クラブ活動に打ち込む	30	17	28	9	15	1	100
ファッション・流行を追いかける	18	23	41	7	10	1	100
恋人を作る	19	18	41	7	14	1	100
目立つことをする	9	11	40	17	21	1	100
何もしたくない	9	6	28	11	45	1	100

この13項目を用いて因子分析を行った結果が表3-11である。第1因子は「恋人を作る」「ファッション・流行を追いかける」「目立つことをする」であったことから「やんちゃ志向」とした。なお「やんちゃ」という言葉は、定時制高校での聞き取り調査のなかでしばしば教員から聞かれた言葉で、昔のヤンキーやワルほどではないが逸脱傾向を持っている生徒を指す言葉である。第2因子は、勉強やクラブ活動、友だちなどの項目がいかにもいわゆる高校生らしいため「健全志向」とした。第3因子には遊びや趣味の項目があるため「遊び志向」、第4因子は仕

事と就職のための資格なので「仕事志向」とした。各因子間の相関は高く、各因子は一元化される傾向も持っている。たとえばやんちゃ志向が強いかからといって健全志向が弱いわけではなく、いわゆるヤンキーやガリ勉といった従来の生徒像は転換されなくてはならない。ただし調査時期が2年時の2月のため、中途退学している層がかつては存在したであろうことに注意が必要である。

表 3-11. 高校生の間にやりたいと思っていること（因子分析）

	やんちゃ志向	健全志向	遊び志向	仕事志向
恋人を作る	0.723	0.050	-0.072	0.001
ファッション・流行を追いかける	0.629	0.004	0.031	0.111
目立つことをする	0.619	-0.093	0.003	0.046
様々なことを経験する	-0.053	0.729	0.012	0.212
進学のための勉強をする	0.009	0.640	-0.079	-0.082
友達と仲良くなる	0.173	0.534	0.158	-0.027
何もしたくない	0.130	-0.449	0.238	0.032
クラブ活動に打ち込む	0.307	0.391	-0.061	-0.219
ゆっくりとする	-0.100	-0.175	0.913	-0.070
たくさん遊ぶ	0.246	-0.048	0.596	-0.026
趣味を楽しむ	-0.103	0.317	0.379	0.168
仕事(アルバイト)をする	0.081	-0.158	-0.069	0.857
就職のための資格をとる	-0.003	0.093	-0.004	0.499
因子相関行列				
やんちゃ志向		0.5301	0.5622	0.3605
健全志向			0.3695	0.3037
遊び志向				0.3781

ここで抽出された4つの因子得点を用いて、クラスター分析を行った結果が図である。ここでは5つのクラスターに分けた。すべての因子得点が高いのが、図の一番左の「元気層」(283名)と名付けたクラスターである。次に健全志向が高く、仕事志向が低い「健全層」(255名)、逆に仕事志向だけが低い「校外層」(377名)と続く。元気層とは逆にすべての因子得点の低いのが「不活発層」(288名)であり、人数は少ないがさらに得点の低いのが「撤退層」(29名)である。なおこの区分は相対的なものであるため、例として表に「友だちと仲良くなる」「仕事(アルバイト)をする」に対する回答割合を掲載した。以下、高校生活の志向性を類型化したこの5つのクラスターごとに詳しくそれぞれの意識を検討する。元気層はほとんど常に「そう思う」と回答する傾向を持ち(健全層より健全であり、校外層より校外的である)、不活発層は「どちらとも言えない」に回答する傾向があること、撤退層は「そう思わない」と答える者が多いことが分かる。

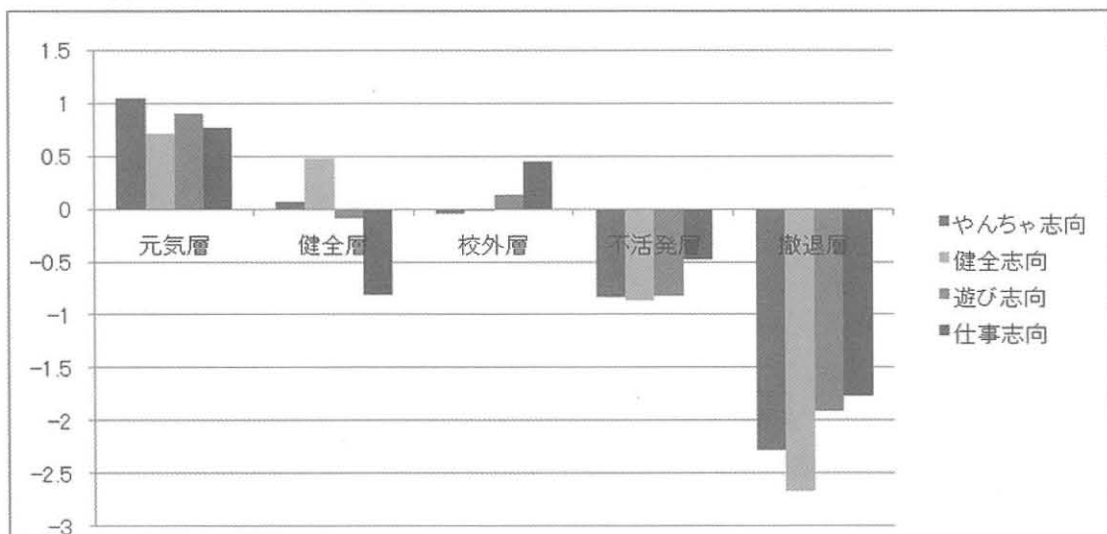


図 3-3. 高校生意識類型（クラスター中心）

表 3-12. 高校生意識類型別高校生活でやりたいこと (％)

	友だちと仲良くなる					仕事(アルバイト)をする				
	そう思う	どちらかと言えはそう思う	どちらとも言えない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない	そう思う	どちらかと言えはそう思う	どちらとも言えない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
元気層	95	4	0	0	0	61	20	17	1	0
健全層	79	19	2	0	0	0	0	47	19	34
校外層	53	36	10	0	0	42	43	14	1	0
不活発層	17	30	47	4	2	11	22	51	8	9
撤退層	0	3	17	14	66	7	10	10	10	62
総計	58	22	15	1	2	30	23	29	6	11

まずは学校ごとの意識類型分布を図 3-4 に示した。全日制には健全層が多く、とりわけ〈全普 B〉にでは半数を占めている。その分校外層・不活発層が少なくなっている。定時制では元気層は全日制と変わらず、仕事志向の弱い健全層がいない代わりに郊外層、不活発層が増加している。仕事志向の強い郊外層がすべての定時制において4割を占めているが、〈定普 B〉〈定総 A〉では不活発層も多い。通信制では元気層・健全層が少ない学校があり郊外層が少なく不活発層が多い。〈通信 B〉では不活発層が半数に達しており、元気層が7%と最も少数である。他の通信と比べて、男性・高年齢が多く、不登校経験者もやや多い。

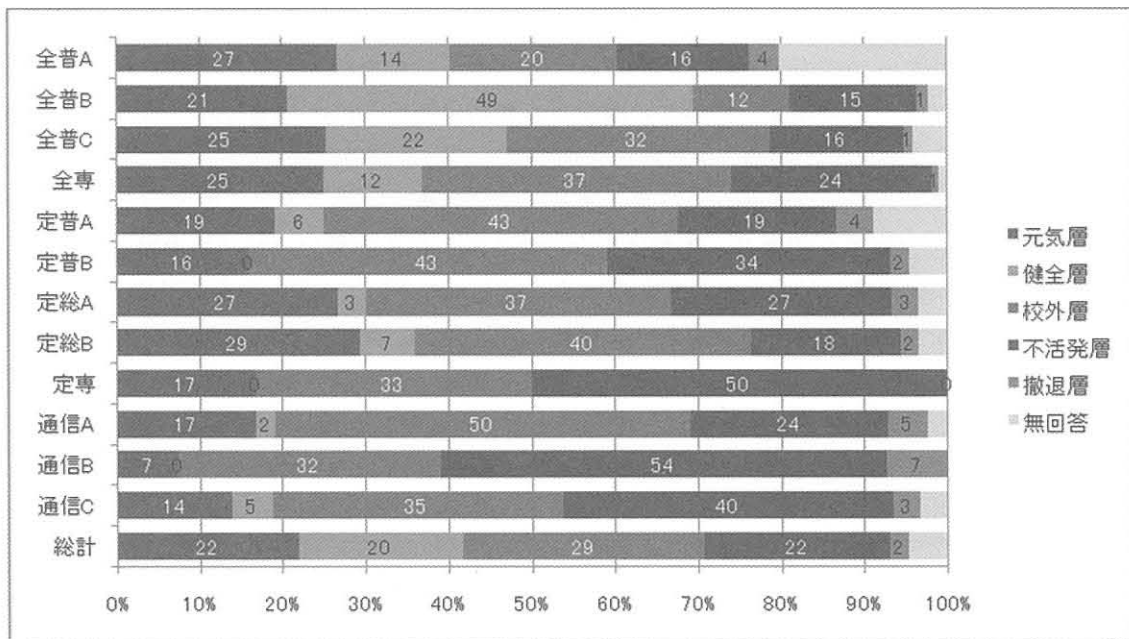


図 3-4. 学校別生徒意識類型

一方以上のような学校ごとの違いはあれ、質問に掲載されている項目のあらゆることから撤退する層が、各学校に存在している。

図 3-5 は意識類型別に学校が好きかどうかを尋ねたもの、図 6 は「学校に行きたくないこと」がどの程度あるのかを尋ねたものである。学校が好きかどうかは、元気層・健全層から順に郊外層、不活発層、撤退層と、好きではないという割合が増加する。一方学校に行きたくないことについて、「よくある」と答える者は全体では 18%であるが、撤退層においては 66%が「よくある」と答えており、他の層と際立った違いを見せている。それに比べ不活発層は他の層と変わらない。

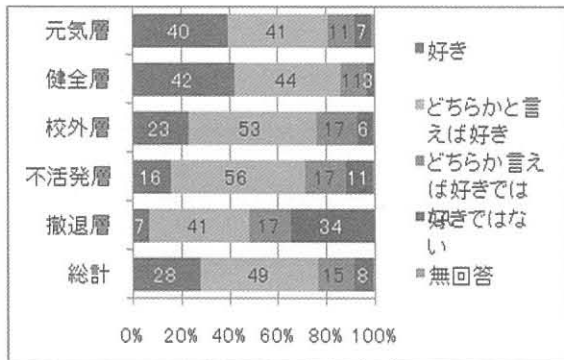


図 3-5. 意識類型別学校が好きかどうか

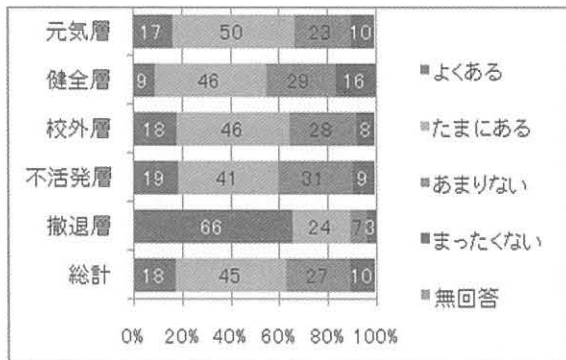


図 3-6. 意識類型別「学校に行きたくないこと」

このことから不活発層は不活発ながらも学校生活に適応していると考えられるのだが、因子得点上はその極端な数値をとる撤退層は、なにゆえ学校からも撤退しようとするのだろうか。中学校時の不登校経験では、校外層・不活発層とならんで、不登校経験は2割強であり大きく違わない。そして成績はむしろ上位が多く、その他の構成は変わらない（ただし撤退層は29名しかいない）。

表 3-13. 意識類型別不登校経験 中学校時の成績 (%)

	ある	ない	無回答	上位	やや上位	ほぼ平均	やや下位	下位	無回答	総計
元気層	11	88	1	4	19	31	33	12	1	100
健全層	7	93	0	5	41	33	12	8	0	100
校外層	21	79	0	1	10	31	38	19	1	100
不活発層	21	79	0	2	15	36	28	18	1	100
撤退層	24	76	0	17	10	31	28	14	0	100
総計	15	84	1	3	19	32	30	15	1	100

図 3-7 は意識類型別に「あなたの未来は明るいですか」という設問に対する回答である。撤退層に「明るくない」「どちらかといえば明るくない」と答える者が66%おり、それに続き不活発層が43%となっている。学校への適応が撤退層を除く層では変わりがなかったのに対し、ここでは元気層・健全層—校外層—不活発層—撤退層という序列が明白である。

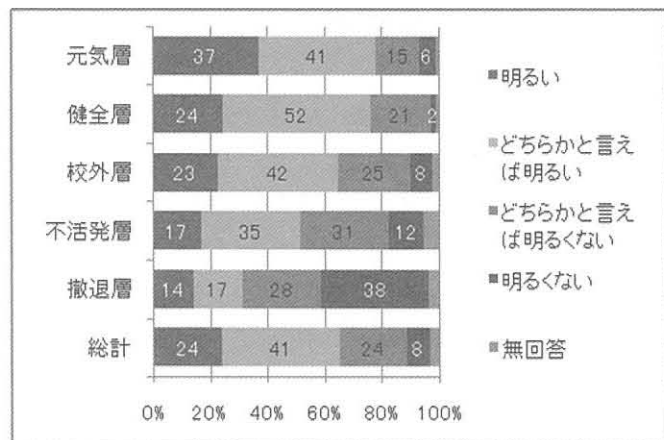


図 3-7. 意識類型別あなたの将来

表 3-14. 自分らしさを感じる時 (複数回答) (%)

	家族といるとき	友達といるとき	彼(女)といるとき	学校にいたとき	クラブ活動をしているとき	仕事をしているとき	一人でいるとき	ない	その他
元気層	50	79	26	24	28	6	45	22	4
健全層	45	69	11	16	40	0	32	23	4
校外層	49	68	19	11	17	7	48	22	4
不活発層	31	49	10	8	12	7	49	17	7
撤退層	34	10	3	0	0	0	66	14	10
総計	44	65	16	14	22	5	44	20	4

表 3-15. 自分の成長を感じる時（複数回答） (％)

	家族と いるとき	友だち といると き	彼(女)と いるとき	学校に いるとき	クラブ活 動をして いるとき	仕事を している とき	一人で いるとき	ない	その他
元気層	22	45	15	33	35	20	15	8	3
健全層	23	34	4	28	54	3	12	9	3
校外層	22	39	11	27	20	30	16	13	2
不活発層	17	23	5	16	17	19	19	27	5
撤退層	14	0	0	7	0	10	3	66	3
総計	21	35	9	26	29	19	15	16	3

これら各層ごとに、自分らしさを感じる時、自分の成長を感じる時はどんな（誰といる）ときかを選択して選んでもらった結果をまとめたのが表 3-14,3-15 である。いずれも一番多いのが「友だちといるとき」で、特に元気層では友だちの選択率が高い。元気層は友だちばかりでなく、家族、彼（女）、学校を選択する者も他の層に比べて多く、多くの局面で自己実現し承認を受けている様子が分かる。健全層はいずれも「クラブ活動をしているとき」を選択する割合が高く、校外層は「仕事をしているとき」を挙げる者が多い。

一方撤退層が自分らしさを感じるのは「一人でいるとき」であり、成長を感じる時は「ない」という回答が最も多い。不活発層はおおむねこれらの中間の値を示している。撤退層にとって、学校に自らをつなぎとめるものを見つけることはできない。定時制高校（あるいは高校一般）が排除された若者を包摂する機能の限界が表れていると言える。比較する材料がないのだが、おそらく以前は仕事をてこにして、学校への包摂を果たすことができたのだろう。しかし現代の（定時制）高校はそのでこを見出しているとは言えない。少なくともそれは多様化し、友だちやクラブ活動、あるいは一人でいることを支援することで支援・包摂しなくてはならない。

3-4 定時制の多様化

高校生の意識類型から見る限り、従来の逸脱青年という類型は抽出されなかった。調査時点が2年生時の2月であるため、すでに中途退学していることもその要因かもしれない。というのも教員による生徒認識類型では「荒れ型」が抽出されたからである。あるいは、「ヤンキー」が消滅、あるいはネタとしてしか存続しえない現代において、「やんちゃ（くん）」という呼称が広がっているが、この「やんちゃ（くん）」の評価をめぐって、生徒と教員の間で相違があるのかもしれない。

いずれにせよ教員の認識に従えば、今回の調査で定時制高校は少なくとも2つに分化——従来のいわゆる教育困難校と問題が混在した高校——していると言うことができる。前章の議論では不登校に特化した進学校というタイプが一部では成立していると思われるが、新しいタイプの〈定総B〉は、不登校に特化しているわけではない。実際に不登校経験者は少なく、高校生活の意識類型でも不活発層に位置付けられる割合は全日制とかわらない。〈定普A〉もまた不活発層は全日制と変わらなかった。こういった状況は地方都市に固有の困難として表れている可能性がある。

新しいタイプの〈定普A〉〈定総B〉はともに、教員の認識では問題混在型として位置づけられる割合が多くなっていた。これらの高校では何をてこにして生徒を支援・包摂しうるのだろうか。先に見た自分らしさを感じる時、自分の成長を感じる時を学校別にした表 3-16, 3-17 を見てみよう。〈定総B〉では、全日制には及ばないが、定時制のなかではクラブ活動が生徒の

自己実現の場となっており、また「友だちといるとき」は全日制をしのぐ。また全日制と比べて、「仕事をしているとき」の回答数の高さは、定時制・通信制ともそこが手掛かりになることを示している。またすべての高校に存在する撤退層は、定時制・通信制に固有の問題ではない。撤退層は不活発層と似た、あるいは不活発層を極端にした意識をもっていることが明らかになった。撤退層にとっての手がかりを探ることも課題として残されているが、「一人でいるとき」が、「成長を感じる時」という問いであったとしても1～2割の選択率であることをどう解釈するのが重要であるように思われる。

表 3-16. 自分らしさを感じる時 (複数回答) (%)

	家族と いるとき	友だちと いるとき	彼(女)と いるとき	学校に いるとき	クラブ活 動をして いるとき	仕事を している とき	一人で いるとき	ない	その他
全普 A	42	69	12	13	16	1	42	8	1
全普 B	38	64	9	17	36	1	34	1	5
全普 C	51	64	16	14	39	2	36	2	6
全専	35	69	12	12	23	2	42	3	2
定普 A	52	58	18	15	6	9	61	1	9
定普 B	44	58	28	14	9	12	37	7	7
定総 A	40	53	23	20	7	0	60	10	3
定総 B	51	85	33	15	22	12	55	0	5
定専	0	67	33	33	0	17	50	17	0
通信 A	48	48	14	14	0	19	62	0	7
通信 B	59	51	27	17	2	17	54	2	5
通信 C	52	60	28	8	4	14	61	1	5

表 3-17. 自分の成長を感じる時 (複数回答) (%)

	家族と いるとき	友だちと いるとき	彼(女)と いるとき	学校に いるとき	クラブ活 動をして いるとき	仕事を している とき	一人で いるとき	ない	その他
全普 A	19	40	8	28	23	10	10	28	2
全普 B	14	29	5	26	47	2	15	13	3
全普 C	27	33	6	23	48	8	12	16	2
全専	19	36	6	27	34	14	16	13	1
定普 A	20	35	12	30	5	36	20	12	6
定普 B	12	40	14	26	12	44	21	16	2
定総 A	23	30	13	23	7	27	23	27	3
定総 B	29	51	17	32	23	38	13	13	3
定専	0	67	33	33	0	33	50	17	0
通信 A	26	21	7	21	2	38	10	19	5
通信 B	33	33	15	25	3	38	20	15	3
通信 C	24	37	18	18	3	52	18	16	7

おわりに

以上、現代の定時制高校の役割を地方の定時制高校調査を対象に考察してきた。調査結果を総括すると、ある定時制高校の役割が見えてくる。それは、制度的に多様化された定時制高校であっても、地方都市では多様化した生徒層を受け入れ(引き受け)ている、ということである。質問紙調査では、従来型のいわゆる教育困難校タイプと問題混在タイプに二分化していると見られる定時制高校であるが、多様化した生徒層は生徒類型からどちらのタイプの高校にも存在するという認識が教員にはあることが明らかになった。高校のタイプによって、引き受けた生徒類型の強弱(多少)は異なるが、どの類型の生徒も受け入れているというこの点に

については、聞き取り調査においても同じ認識が確認できる。地方の定時制高校の役割は、その意味では、二重の課題を抱えているとも言える。一つは、定時制高校の制度的多様化に伴う多部制、単位制、3修制等に応じたカリキュラム、教員配置、学校運営など生徒層の多様化に対応した新たなタイプとしての高校改革の実現であり、もう一つは制度的改革への対応の一方で、受け入れることになる生徒層を都市部のようには絞れず（特化できず）、多様な生徒層を受け入れざるを得ない現実への対応である。

さて、このような役割を果たさねばならない現代の定時制高校の位置を、後期中等教育、あるいは、現代の若者の学校から職業へという移行局面から眺めてみることにする。高口は「卓越化を目指した競争」に対して、「周辺化をめぐる競争」と呼んでいる³⁰。その側面からみると、現代においては、周辺化をめぐる競争は多様化し、学力競争の周縁だけでなく新しい種類の周縁化競争の境界線に定時制高校は位置していると言えるだろう。一部の定時制高校は従来の周縁に、そして一部は新しい周縁に、そしてどちらにも特化することができない定時制高校は二重の、あるいはさらに複雑な周縁のなかに存在することになるのである。

この周辺化にさらされる定時制高校の現状をさらに解明していくには、今回の調査結果から次の課題が提示される。まずは、多様化した定時制高校ではどのような指導がおこなわれているのか、ということである。さらには、質問紙調査で明らかになった撤退層について、彼らへの関わり方を考えるために、撤退層となる理由やその過程の解明である。

ここ数年の経済不況の深刻化により、各地で統廃合が進められてきた定時制高校への志願者が増加し、入学できない生徒数が増えている³¹。高校改革下で定時制高校の存在そのものが問われる今、そこに集まる生徒層と定時制高校の抱える役割を再考することが求められている。

※本稿では「はじめに」「第2章」「おわりに」を柿内真紀、「第1章」を太田美幸、「第3章」を大谷直史が分担執筆している。

※※本研究は、平成19～21年度科学研究費補助金・基盤研究C「地域社会の変容下における定時制高等学校の危機と対応過程」（研究代表者：高口明久・柿内真紀）による。

<注>

- ¹ 高口明久・柿内真紀・大谷直史・太田美幸(2008)「高校教育改革下の定時制高校の状況」鳥取大学地域学部『地域学論集』第4巻第3号。
- ² 前田崇(2009)「戦後復興期から高度成長期の社会変動と定時制高校の社会的機能の変容」『日本学習社会学会年報』第5号では、千葉県の事例から地方都市における定時制の機能として、「全日制入学失敗・中退者の受け皿(全日制的補完機能)」化が70年代に進んだとしている。
- ³ 片岡栄美(1993)「学校世界とスティグマ-定時制高校における社会的サポートと学校生活への意識付与-」『関東学院大学文学部研究所報』17号。
- ⁴ 片岡栄美(1983)「教育機会の拡大と定時制高校の変容」日本教育社会学会『教育社会学研究』第38号。
- ⁵ 今井博(1995)「定時制高校の研究(Ⅰ)」『関西教育学会紀要』第19号。
- ⁶ 片岡栄美(1993)「戦後社会変動と定時制高校——都市型および農村型定時制高校の変容の比較」『関東学院大学文学部紀要』第68号,p.92。
- ⁷ 同前, p.95,105,119。
- ⁸ 同前, p.105。
- ⁹ 同前, p.119。
- ¹⁰ 今井博(1998)「定時制高校の研究(V)」『関西教育学会紀要』第22号。
- ¹¹ 小林千枝子(2007)「昼間二交代定時制高校を生きた少女たち——職場と学校のはざまに潜む学習意欲の特質を探る」『作新学院大学紀要』第16号。
- ¹² 同前, pp.26-28。

- ¹³ 同前, p. 28。
- ¹⁴ 同前, p. 32。
- ¹⁵ 同前, p. 31。
- ¹⁶ 同前, p. 35。
- ¹⁷ 前田崇(2007)「一九五〇年代の地方都市における高等学校定時制課程生徒の生活規範——県立高等学校定時制課程の企業内分教室を事例として」国際アジア文化学会『アジア文化研究』第14号。
- ¹⁸ 前出, 片岡栄美(1993) pp. 112-120。
- ¹⁹ 長谷川裕(1993)「学校の規律・訓練」教育科学研究会『講座現代社会と教育 第3巻 学校』大月書店
- ²⁰ 神野賢二(2006)「ノンエリート青年の「学校と仕事の間」のリアリティー——ある高校中退者の事例から考える」日本労働社会学会『労働社会学研究』第6号。
- ²¹ 都市部の夜間定時制高校で、「やんちゃくんと不登校を分けました。クラスを分けました」と述べる(2007年聞き取り調査より)ような状況が一層シビアに表れるのが地方都市と考えられる。
- ²² 1990年代に入学者が変化したとする実証的な研究はないが、1990年前後に不登校生徒の進学先として活用され始めたという話を聞き取り調査等で聞いている。
- ²³ 今井博(2007)「後期中等教育諸学校の変容と現状——定時制高校「終焉」(1988年)以後——」『常磐会学園大学研究紀要』No. 7。
- ²⁴ 「終焉」という言葉を役に立たなくなったという意味で否定的に用いているのではなく、そもそも全日制ではない、パートタイムの形態をすべてひっくるめて定時制と呼んでいたにすぎないことを指摘している。
- ²⁵ 前出, 高口明久他(2008), p. 358。
- ²⁶ 本調査では仕事の内容や雇用形態を聞いておらず、また働くことが生徒にとってどの程度の重みを持っているのかは判断できない。しかしながら昨今の状況を見る限り、正規職員として働きながら高校に通っているという従来の青年像では捉える事が出来ない。
- ²⁷ 大谷直史・中宇地節雄・太田美幸(2009)「若者たちの文化・労働と鳥取の現状」『鳥取大学生涯教育総合センター研究紀要』第5号, 2008。
- ²⁸ 学力問題因子は、脱社会因子・反社会因子との相関が高く、縦社会への適応と考えている軸を示す可能性がある。
- ²⁹ 定時制・通信制高校はほぼ志望者すべてを受け入れており、通常偏差値は受験関連産業によって表示されることはない。しかし近年のいわゆる新しいタイプの高校では、実質的に全日制と変わらないところもあり、偏差値が表示されることもある。
- ³⁰ 久富善之・高口明久(1993)「今日の学力競争の社会的土台」『教育』No. 557, 1993年1月号。
- ³¹ たとえば, 朝日新聞(大阪本社版)2009年10月19日付「定時制不合格1174人」の記事。